

と く  
徳

ほ う  
朋

仏さまとわたし

ほうし そうん  
蓬茨 祖運

ほうし そうん

1908-1988

福井県出身。真宗大谷派教  
学研究所元所長、真宗大谷  
派賢隆寺元住職。

私たちが、喜んだり悲しんだりして、この人生を歩いてゆく、そこに一体どういう意味があるのだろうか、ときどき考えさせられます。

たとえば独立ということにしても、それはけっして他人に厄介やっかいにならないということではないのです。むしろそれは孤立こりつでしょう。真に独立するといふときは、私以外のすべてのものを私の心の中に入れて、少しの碍さわりもないことでなければなりません。入れようとしても入らないのは、自分の心が狭いからで、狭いのはそれだけ自分を限って自ら小さくしているからでしょう。だから、外からいろいろ刺激が与えられると、苦しんだり悲しんだりするわけです。

しかしそれによって、今まで凝り固まっていた狭い心が破れて、やがて広く他のものを入れられるようになっていく。そこに人間の成長がある。世の中の広さに応じて、われわれの心も広くなる。ですから心の広がりには無限のものがあることになります。

「生死しょうじを超える」ことが、仏さまに会うことです。それは世の中の全てを、わが身一人に引き受けて立つということに他なりません。つまり、無限の世界を求めつつ、歩みつづけてゆくことです。

それはもう死ぬことが恐ろしくなくなったということではございません。死はやはり恐ろしい。しかしその恐ろしい死をも引き受けて立つ、そうした意味を見ることの出来る世界が私の心に開かれてくるのが、仏さまに会うということです。

そこから毎日の生活を振り返ってみますならば、悲しいことや喜びの一つひとつが、私の心を転ずる仏像になってゆくのではないかと存じます。

(『蓬茨祖運選集』)

人間が自分の力だけで成長する事など不可能です。他者との関りの中で、喜びや苦しみや悲しみの経験を通して心が成長していきます。広い世界に会うという事を通して私のもこの見方も当然変わる訳です。「仏さまに会う」という事は無限に広い世界を知る事です。そんな世界に気付けば、全てのご縁がありがたく思えます。(哲弘 拝)



この「徳朋<sup>とくほう</sup>」は仏教を拠り所として生活した方々の言葉に直に触れ、仏教を頭で一生懸命に理解するのではなく、この身で感じる事を願いとして副住職が毎月作成しています。

